

<http://fukushimafolklore.jimdo.com/>
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

コロナ禍での学会運営

新型コロナウイルス感染症が全国に広まり、私たちの暮らしが大きく変化してから間もなく2年となります。当会でも昨年度の大会、地域持ち回り研究会（50周年記念シンポジウム）、東北地方民俗学合同研究会（福島大会）を中止としました。今年度も同様に大会が中止となり、地域持ち回り研究会についても開催の目途が立っておりません。また合同研究会については動画配信の形式で開催をすべく、準備を進めているところです。このように主要な事業のほとんどが大きな影響を受けており、対面での開催ができずにいます。しかし、役員や事務局ではその時々状況を考えながら議論を行い、できることから進めてきました。

当会では幹事会という役員会を年2～3回程度行っており、昨年度の春以降も対面及びメール等により会運営について協議を進めてきました。また通信誌ならびに会誌の編集にあたり、編集担当幹事が1～2ヶ月に1度のペースでオンラインによる編集会議を開いています。研究会などの対面事業の多くは感染状況を確認しながらできる限りの計画を立てていますが、実際には最終的に中止や延期等の判断をすることが多くなっています。

但し、対面事業が大きく制限される中でも会としての情報発信は重要です。お気づきの方もおられると思いますが、昨年度に学会ホームページのデザインを一新しました。会誌の目次や通信誌の内容、過去の活動をより一層見やすい形で掲載しています。また随時更新しているのがFacebookページです。こちらは学会活動に加えて県内の民俗関係の情報を紹介しています。ページ内で検索をかけると、数年分の県内民俗情報から必要な内容を取り出すことができるデータベースとしても活用いただけると思います。また通信誌『ふおーらむ・F』は会員の気軽な情報交換の場としてご利用いただけます。小さな話題でも構いませんので、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしております。

当会は昭和45年度に発足し、令和2年度が創立50周年に当たっていました。既にご通知の通り記念書籍の出版、記念シンポジウムの開催、会誌50号の記念号と

しての発行を企画し、検討を進めてきました。しかし昨年から書籍出版に向けた編集会議を開催することができない状況が続き、シンポジウムも延期を余儀なくされています。楽しみにされている会員の皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、少しずつ進めてまいりますのでしばらくお待ちください。なお、会誌については今年度末に記念号を刊行する予定です。

当会のような地域学会にとって、顔を合わせて行う情報交換の場が制約されることは大きな痛手ですが、オンライン等を活用した事業の展開も難しく、悩みを抱えながらの学会運営が続いています。一方各地では行事や祭りが軒並み中止となり、また冠婚葬祭や日常的な社会関係も大きく変化しているものと思われます。会員の皆様の日頃の調査研究にも大きな制限が続いていることでしょう。しかしこうした状況下であるからこそ見えてくる地域の民俗の特徴や暮らしの場面があるかも知れません。学会の活動や地域の民俗について気づいたこと、感じたことがありましたら、お気軽に事務局までお寄せください。

（事務局 内山大介）



一新したホームページ画面

●会員と会内外の情報交換の場として、『ふおーらむ・F』を積極的に活用していきたいと考えています。皆さんの周囲にある「小さな情報」や「発想」をお寄せください。文字数は千字程度までとさせていただきます。掲載は編集委員にお任せ願います。

noteから 郷土料理「ベンケイ」の新たな発見

『福島の民俗』42号の「研究ノート」にて南相馬市原町区萱浜に伝わる郷土料理「ベンケイ」について報告をした。

ベンケイは、江戸時代後期、主に北陸地方から入植した浄土真宗移民が持ち込んだと伝わる。大根、芋がら、赤唐辛子を酢、醤油、砂糖で炒め煮した料理で、かつては正月用の保存食や浄土真宗のお講等、ハレの日の食べ物とされた。現代においては、材料の収穫時期である晩秋から冬の“季節の味”として受け継がれている。

その名称は、移民の出身地の一つである越中（富山県）砺波地方の方言「ベンケ＝大根おろし」、「ベンケオロシ＝唐辛子を入れた大根おろし」が由来であると考えられる。

萱浜地区は、東日本大震災による甚大な津波被害のため、地区のほとんどが災害危険区域となり、居住が制限された。今後どのようにベンケイを継承していくかが課題である。ベンケイの詳細は『福島の民俗』42号を参照いただきたい。

最近、福島県内で同じく「ベンケイ」という名の郷土料理があることが判明した。伝わる場所は旧岩瀬村深渡戸地区周辺（現・須賀川市）である。こちらのベンケイは、紅葉おろし、小口切りの長ねぎ、空炒りした油揚げ、崩して空炒りした豆腐を混ぜ合わせたもので、醤油をかけて食べる。萱浜地区と同様、正月や冠婚葬祭等のハレの日に食され、保存食とされているという。使用する材料も、伝わる地域が限定的であることも共通しており、大変興味深い。

砺波地方の方言がベンケイの由来だとすれば、旧岩瀬村のベンケイの方がこの語源に忠実な料理といえる。萱浜地区に限らず、浄土真宗移民が北陸地方から奥州中

村藩に至る途中に立ち寄った場所には、「ベンケイ」や「ベンケイのようなもの」が伝わっているとしても不思議はない。

移民が辿った経路は明確に分からないが、多くが越後から会津へ入り、中通り（塩の道と呼ばれる二本松から川俣を経由するルートが多かったようだ）を通して中村藩へやって来たと伝わる。その際、旧岩瀬村を経由した可能性が無いとは限らない。旧岩瀬村には奥州道中が通っていることから、そちらのルートを使ったか、あるいは、目的地が中村藩ではなかった可能性も考えられる。

料理名が同じで使用する材料も酷似している点は、萱浜地区のベンケイを調査する上で大きな発見である。ベンケイには変遷があるのかもしれない。越中から伝わる課程で、その作り方や材料が徐々に変化していったのではないだろうか。

県内にはベンケイに似た料理がほかにも存在するかもしれない。引き続き調査を続け、ベンケイの謎を解き明かしたい。（会員 川崎 悠）



旧岩瀬村深渡戸のベンケイ

相馬地方にもあった藁人形

相馬中村藩の村落ごとに書き上げた地誌『奥相志』^{おうそうし}は、編纂当時（安政4〈1857〉～）の江戸時代末の村々の様子を知る上で欠かせない史料である。宇多郷新田村（現、相馬市新田）のなかに「当村年中行事」という項目があり、新田村の年中行事が記録されている。短い記録ではあるが、今日では廃絶してしまひ痕跡すら残っていない行事もあるので紹介しておきたい。残念ながら『奥相志』には当村以外に年中行事の記録はほとんどない。

正月15日には新郎を川に入れる婿いじめの「川入り」、新郎新婦の顔に墨を塗る「墨祝」があった。6月から7月にかけては、稲虫や時行病（流行病）を何ものかに憑依させ、五色の紙に馬を描いたものと共に竹葉に下げて螺や太鼓で囃しながら村境に送る行事もある。10月の「人形行事」は、若者が集まって稲穂偶（稲の人形か）を作り、これを「賊」と名付けて辻に置き、田んぼの作物を盗む者があれば竹槍でこの人形を突いたという。

正月15日の行事は当時すでに形骸化していたが、「当村は旧例を以てその式甚だ厳なり。然れども天保數年以來頽廢些かの形あるのみ」とあって、天保の飢饉（1833～39）後衰退したという。飢饉などの危機を契機に民俗は消滅、変容する。福島県立博物館の企画展「ふくしま藁の文化」を拝見し、近年の相馬地方に藁人形を作る習俗が確認できないのは、しばしば危機的状況に見舞われたことで、当地方の民俗が失われてしまったことが一つの要因なのかもしれない。*『奥相志』は旧相馬市史第4巻（1969）所収（会員 岩崎真幸）

いわき市金刀比羅神社の例大祭と 縁起物の市

(1) いわき市金刀比羅神社

いわき市常磐関船町の金刀羅大権現宮（現在の金刀比羅神社）は、永正2（1505）年、四国讃岐の金刀比羅宮を勧請して創設されたと伝えられている。江戸時代後期には海難救済の神として、地元の漁民をはじめ、茨城県北部から三陸海岸に至るまでの広い範囲の漁師・船乗りたちの尊宗を集めた。社殿には50面に及ぶ絵馬が奉納されており、信仰の深さを示している。

1月10日の例大祭には、北茨城の平潟、大津付近の漁村から夜明け前に出発して徒歩で来る人もいた。ときには、三陸海岸の大船渡から、マグロを一本奉納する人もいて神社の人たちを驚かせたこともあったという。

現在ではこうした漁業関係者に加えて、いわき市界限の店主や会社経営者、さらに一般の参詣者が家内安全・商売繁盛を祈願するために訪れ、普段静かな境内は人でいっぱいとなる。臨時の駐車場からシャトルバスが運行されるほか、近隣の駅であるいわき湯本駅から歩いてくる人も多い。近くのお店の方々によるとその有様は、「歩いているうちに人波にもまれて体が浮きあがる」ほどであるという。

例大祭当日は境内で七福神に扮した人たちによる福銭まきや神楽の奉納などが行われる。とくに駅から神社にいたる道筋に店を出ず露店の縁起物商たちが並ぶ縁起物は圧巻である。

(2) 縁起物大集合

金刀比羅神社の例大祭に集まる縁起物商たちは地元いわき市のだるま店を始め、栃木県・群馬県などの縁起物商や東京の熊手商などもあり、関東地方の縁起物が集合する景を見せている。

だるま だるまは地元いわき市のだるま店、白河市のだるま店、それに全国一の販売数を誇る高崎市のだるま店がそれぞれのだるまを販売している。地元いわき市のだるまは顔を群青色で縁取りされ、初めから両目を入れて売られているのが特徴である。群青はいわきの海の色を表しているという。

熊手 熊手は、東京の浅草大鷲神社などの酉の市で売られる飾り熊手がよく知られているが、ここで売られる熊手は比較的指物が少なく、柄の短いものが主流である。大きさも規格があって、値段もあらかじめ決まっている。東京の酉の市でみられるような売り買いの駆け引きや意匠の華やかさはないが手軽に購入することができる値段設定になっている。

枝成金 割り竹を加工した枝に、小判、さいころ、鯛、恵比寿大黒などの人形を吊り下げた縁起物で「吊るし」「ちゃらちゃら」などとも呼ばれているが、製造してい



縁起物の店が立ち並ぶ金刀比羅神社の例大祭

る人たちは「枝成金」と呼んでいる。吊り下げる鯛や恵比寿大黒の人形はソフトビニール製であるが平成の初期まではセルロイドで作られていた。

千葉県市川市で最近まで枝成金を製造していた縁起物商の話によると、枝成金は大正時代後期に名古屋の縁起物商が製造したものが発祥

であるという。また東京都江戸川区の縁起物商が、昭和22年に縁起物商の仕事をしたときには静岡市、川崎市の川崎大師の土産物店、北関東の縁起物商などから多くの枝成金の注文があり、忙しかったという。

鯛などの吊るし物を作っていた東京都足立区のセルロイド人形作りの職人の話によると昭和46年ころは、枝成金につける鯛や恵比寿大黒の人形は9月ころと年の暮れにたくさんの注文があり、非常に忙しかったという。

こうした話から、枝成金は昭和20年ころには10月20日もしくは11月20日に東海地方、北関東で開かれるえびす講と呼ばれる市や、年明けに開かれる東北地方の縁起物の市で売られたようである。その原型は江戸時代、亀戸天神（東京都江東区）の初卯祭りなどで売られた繭玉や、静岡市域で売られている伝統の縁起物である「ご縁起」に見出すことができる。

(3) 福を売る場

福島県では会津地方で行われる初市がよく知られている。1月7日の磐梯町初市を皮切りに、会津若松市（1月10日）、喜多方市（1月12日、17日）、猪苗代町（1月13日）など規模の違いは様々だがたくさんの市で縁起物が売られる。

いわき市など県南地域ではそれほどの数は見られないが金刀比羅神社の例大祭にみられるように多くの人が現在も福を求めて集う。こうした市に行きにくい地域では行商などが縁起物を売りに来たり、近所の店で購入した。例えば東白川郡塙町では暮れになるとダンゴ刺しの木に吊りさげる麩菓子で作られた鯛や大黒像などを町の菓子店などで購入して飾った。

また会津地方のおきあがり小法師や風車など地域限定の縁起物も見られ、興味深い課題が多い。

（会員 堀 充宏）

